提出締め切り: 帰国後１ヶ月以内　　提出先: shien@asafas.kyoto-u.ac.jp

京都大学大学院　アジア・アフリカ地域研究研究科
フィールドワーク・インターンシッププログラム 2011 年度　JASSO 派遣報告書

報告者氏名　丹羽爾朗　　２２　年度（入学・編入）

1.研究課題：

ケニィ語―その記述と実質性に関する考察―

2.派遣期間：

平成　２３年　８月　３０日　～　２３年　１１月　２日　（　６４　日間）

3.今回の派遣により、申請時に自身の目的としてあげた点について得られた知見を述べてください

ケニィ語の民族語としての実質性についてかなりの確証を得ることが出来た。またマケレレ大学ではケニィ語の先行研究についての情報を得ることが出来た。まず今回調査したブシア県(Busia District)のマジャンジ村(Majanji)ではケニィ語とサーミア語という二つの言語が異なる言語として存在していることを確かめることが出来た。ケニィ語とサーミア語は同じマジャンジ内に併存していながら音韻論、語彙、形態論すべての面でかなり異なっていることが判明した。情報提供者にケニィ人の歴史について尋ねたところ、ケニィ人はガンダ王国から脱出した後、ヴィクトリア湖(Lake Victoria)の島々を転々とし、マジャンジから大陸部に上陸したという。ナワンピティのケニィ語もマジャンジのケニィ語と異なっていることを考えると、おそらくマジャンジではケニィ語がかなりの程度保存され、カリロ県のような北部に向かうに従って他の言語と同化がすすみ、その地域で優勢な言語と区別が非常につきにくくなっているのだと考えられる。

4. 自身の今後の海外への渡航や留学に向けた課題や展望について

まずケニィ語についてまだまだ未解明な部分が多いため、引き続きウガンダへの渡航が必要と思われる。まず必要なのはカリロ県において優勢な言語であるソガ語(o-lu-Soga)のラモジ方言(lu-Lamogi)を調査し、ナワンピティのケニィ語との比較を行うことである。そのうえでマジャンジにおけるケニィ語と優勢な言語のサーミア語(o-lu-Saamia)、ナワンピティにおけるケニィ語の四言語を比べケニィ語がどのような歴史を辿ったのかについて、より明瞭な全体像を得ることを目指す。また、その後は他地域のケニィ語を調査することも求められるであろう。特にナイル・サハラ系の言語の分布地域内のケニィ語は、バントゥー諸語内のケニィ語しか調べていないため、比較のために調査を要する。

5. 本プログラムに関して意見をお聞かせください。また、今後どのような留学プログラムがあれば参加したいですか？

こちら側で多くのことを決めることが出来、優れたプログラムであったように思われる。他のプログラムは語学研修のために多くの日にちを割かねばならないなど、自らの裁量で決められない部分が少なからず存在している。このため、他のプログラムでは座学に集中できる時間が制限され、研究者がテーマ性の曖昧なままフィールドへと向かう可能性が存在する。一方で本プログラムは自らの判断で行動することが出来、また滞在日数の調節が出来て良かったように思われる。

署名